様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 11 日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007～2009
課題番号：１９５１０２８１
研究課題名（和文）　日本におけるクィア・スタディーズの可能性

研究課題名（英文）　Queer Studies in Japan—Possibilities/Potentialities

研究代表者
風間　孝（KAZAMA　TAKASHI）
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：５０３８７６２７

研究成果の概要（和文）：英米起源のクィア･スタディーズを日本の文化・社会において適用する場合の可能性を明らかにするために研究を行った。その結果、①ナショナリズムとグローバリゼーションに関わる問題系が、日本におけるジェンダーやセクシュアリティの政治的・文化的な統御と管理とを考えるにあたっても欠かすことのできない問題として急激に浮上しつつあること、②セクシュアリティおよびジェンダーが階層・階級、人種・民族、地域、国籍といった軸と交差しながら存在しているとの視座から研究を進めていくことの重要性、を確認した。

研究成果の概要（英文）：Research was conducted to account for the feasibility of applying Anglo-American based Queer Studies to Japan's culture and society. As a result, the following points were confirmed: it is imperative to consider the relationship between nationalism and globalization in the political and cultural government and regulation of gender and sexuality; research needs be conducted from a frame of reference that posits sexuality and gender as intersecting with axes of social positioning, class, race/ethnicity, regionalism and nationality.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	900,000	270,000	1,170,000
2008 年度	900,000	270,000	1,170,000
2009 年度	1,600,000	480,000	2,080,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：複合新領域
科研費の分科・細目：ジェンダー・ジェンダー
キーワード：クィア、ジェンダー、セクシュアリティ

１．研究開始当初の背景
(1)クィア・スタディーズは 1990 年代、セクシュアリティとジェンダー研究における新たな分析視点として、さまざまな学者の批判的かつ批評的な分析を通して登場した。1990 年半ばには英語圏を中心とする諸外国、とりわけ英米においてクィア・アジアに関する文献も増えていった。
(2)ところが、英米ならびに非英語圏における日本やアジアに関連したクィア・スタディー

ズの研究内容は、その多くが地域研究としての一面をもち、日本をはじめとするアジア地域諸国の文化・社会に根ざした理論および実証研究の展開としては不充分であるとの指摘がなされるようになった。

２．研究の目的

(1) 本研究が目指すのは、英米起源のクィア・スタディーズが、英米と重なるところがありつつも全く同じではない日本の文化・社会にそのまま当てはめられるかどうかを探究することである。

(2) 本研究の目的は、日本におけるクィア・スタディーズの可能性を検討することである。英米をはじめとした諸外国からの日本に対する影響、あるいは日本からの諸外国に対する影響を考慮しつつ、日本の文脈から英米のクィア・スタディーズ（日本を対象としたものを含む）の再検証を試みる。ジェンダー、民族性、身体性、言語などを越えた「日本」という地理的・精神的・アイデンティティ的空間・次元から、非規範的セクシュアリティを考察することで、既存のクィア・スタディーズを重層的な広がりをもつものへと展開させていくことを目指す。

３．研究の方法

(1)本研究では、理論班と実証班を設け、研究を遂行した。

(2)理論班

「日本におけるクィア・スタディーズの可能性」を探求するにあたり、本研究班が目指したのは、日本のセクシュアル・マイノリティをめぐる事例研究から出発し、その結果導き出される理論を、英米を中心として展開されてきた現行の主流クィア理論における議論と付き合わせる、という方向ではなく、むしろ、近年のクィア理論における中心的な議論をまず読み込むことで、内破的にその限界を見極めるとともに、その限界点を踏まえた上で現代日本という特定の歴史的・地理的な背景においてクィア理論がどこへ向かうべきなのかを考察することであった。

(3)実証班では、日本におけるジェンダー／セクシュアリティに関わる社会運動や法制度、生活実践、また LGBT が置かれている状況を具体的な個別テーマから「日本におけるクィア・スタディーズの可能性」を検討した。

４．研究成果

(1) 理論班（清水晶子、マリィ・クレア、川坂和義）：ジュディス・ハルバースタムの提唱した「クィア・タイム」および「適切さ」の概念を巡るフェミニズム／クィア理論の諸文献、さらに、クィア理論におけるこれらの概念の前景化とその政治的背景において重複するところを持つ、クィアネスと国家概念やグローバリゼーションの問題を考察した諸文献を理論的に検討するとともに、これらの理論が提示する諸問題が現代日本におけるジェンダーやセクシュアリティにかかわる権力作用や諸規範とどのように交錯するのかの分析を行った。

この結果明らかになってきたのは、以下の二点である。まず、現代の主流クィア理論における重要な論点の一つであるナショナリズムとグローバリゼーションに関わる問題系は、日本におけるジェンダーやセクシュアリティの政治的・文化的な統御と管理とを考えるにあたっても欠かすことのできない問題として急激に浮上しつつある。しかし、近年の日本におけるクィア・スタディーズはこれらの問題に十分に応えてきたとは言えず、この点は今後の重要な研究課題として早急に取り組まれるべきである。第二に、しかしながら、英米を中心としたナショナリズムやグローバリゼーションに関わる理論はあくまでも英米の政治・文化状況を背景として提出されており、日本において同様の問題を考察するにあたっては、それらの理論を導いた問題意識を共有しつつも、時には一見したところそれらと異なる介入点、あるいはそれらに反する議論をも提示する必要がある。

具体的に、いかなる介入点、いかなる議論が有効なのかについては今後の研究の課題であるが、これらを探求することによって、日本におけるクィア・スタディーズの向かうべき方向を示唆するのみならず、従来のクィア理論に対して新しい理論的展開をもたらすことが可能だろうと考えられる。

(2)実証班

個別テーマの検討をとおして、身体、マスメディアの表象、ローカル／メトロ／グローバルなどの〈場〉など、いくつもの交錯する軸をさらに考察することの必要性が確認され、これらの考察をとおして、セクシュアリティおよびジェンダーが階層・階級、人種・民族、地域、国籍といった軸と交差しながら存在しているとの視座から研究を進めていくことの重要性を確認した。

①クィアと経済（釜野さおり）：諸外国の先行研究では、レズビアンの経済状況は異性愛女性よりもよい（あるいは同程度）という結果で一致しているが、本研究で分析した日本のレズビアン・カップルの経済状況からは、その逆の可能性が読み取れた。レズビアンは同年齢層の女性全般よりも正規職員である

率が低い可能性が見いだされた。家計管理方法においては、より共同性・平等性の高い「共同管理」を行うカップルが、異性間の婚姻カップルに比べ、多かった。但し、データの制約があるため、これらは目安としての比較に留まっている。今後この分野の研究を展開していくためには、非異性愛者の就労や経済状況を明らかにするための質的調査の実施や、多様な性的指向、性自認、親密関係の実態が明らかになるような公的統計の整備が不可欠である。同時に「異性愛（者）」と「同性愛（者）」、「男性」と「女性」といった分断を疑問視し、全ての人が異性愛者で男か女のどちらかであるということを前提としない公的統計の作成方法を検討していく必要がある。

②クィアと法（谷口洋幸）：本研究では（A）国連機関・条約機関における性的マイノリティの位置づけ、（B）日本の人権状況に関する審査の内容と結果、（C）個別のテーマにおけるクィアと法のかかわり、以上の３点について一次資料（国連公式文書等）の分析を進めた。（A）では、国連人権委員会の時代から今日の国連人権理事会、さらに人権諸条約に設置された条約委員会の審議過程の中から性的マイノリティに関連する議論を抽出し、国際人権法の文脈における性的指向・性別自認の位置づけを総括した。（B）では、国連人権理事会の普遍的定期審査、自由権規約委員会および女性差別撤廃条約の日本レポート審査等を対象に、性的指向等のとりあげられかたについて分析を行った。（C）では、人権諸条約における「婚姻」の人権保障と同性カップルの関係、女性差別撤廃条約１６条における同性カップルの位置づけを検証した。

以上の結果、国際人権法の文脈において、性的マイノリティの人権保障が性差別の禁止という文脈から徐々に議論されはじめてきたこと、2000 年代後半に入って締約国レポート審査の手続の中で日本にも影響を与えはじめたことが解明された。

③クィアと社会運動（堀江有里）：本研究では、同性間パートナーシップの保護／保障をめぐる動向を取り上げた。日本においても 1990 年代以降、そのニーズが顕在化するなかで議論が生みだされはじめた。しかしその動向のなかには、日本に特有の婚姻制度の問題が捨象される傾向にある。とりわけ、ほかの領域での社会運動では指摘されてきた、婚姻制度が戸籍制度や天皇制と結びついて存立する構造については議論の俎上に上がることがほとんどない。これらの事柄を検討することによって、グローバルなニーズの議論と同時に、日本特有のローカルな法制度の問題を検討することの必要性が明らかになったといえる。このような点から示唆される課題が、さしあたり以下の二点であることが確認された。まず、英語圏でのクィア・スタディーズが国民国家や民族などへの問いを含む視角をもっていることから、その知見が日本の文脈のなかでどのように共通点や相違点をみいだすことができるかという点である。そして、日本という文脈において LGBT の社会運動がさまざまな法制度への抵抗運動とどのように接続可能／不可能なのかを検討すべき課題としてあげることができるのかという点である。

④クィアと生活構（河口和也）：本研究では、生活主体と社会構造の連結点に位置つけられ、生活主体が社会構造に関与して構造化されたものであるという「生活構造論」の考え方を導入し、非大都市圏におけるクィアの生活を把握する際の準拠枠組みとした。調査方法としては、人口 100 万ほどの地方都市で、まずパイロット調査として、2008 年 8 月から 2009 年 1 月にかけて非異性愛を自認する 7 名に対してそれぞれ 90 分から 3 時間までの聞き取り調査を行ない、それをもとに本調査に向けて生活実態の概略を理解し、質問項目を作成した。その後、2009 年 3 月から 2009 年 10 月までに 6 名に対してそれぞれ 2 時間から 3 時間にわたり本調査として聞き取りを実施した。

調査の結果、調査を実施した都市における聞き取り対象者からは、近年のインターネットをはじめとする情報化によって、クィアに関する情報入手可能性は非大都市圏においてもかなり促進されているが、大都市圏に比べると、イベントや出会いの場をもつことができないことに対する欠乏感が強いこと、また、ゲイ男性のあいだでは、エイズ活動の組織がないことなどに合わせて、主体的にエイズの情報などを得る機会が少ないために、HIV 感染の増加に対する危機感を抱いているインフォーマントも少なくなかった。

⑤性自認概念の変遷（石田仁）：本研究では、gender identity 概念の意味の変化に着目した研究を行った。性別越境が論じられる際に用いられるこの概念の変化を追うことで、どのような性のとらえ方・語り方が開かれ、あるいは逆にそうした可能性が閉じられていくのかを明らかにするためである。専門書誌から一般雑誌までを幅広く対象に言説分析を行い、以下の新たな知見を得た。第一に、ジェンダーの属性のなかで生得的・不変的な位置を占めていた core gender identity 概念が 90 年代中盤頃に医学雑誌で消滅した。第二に、その頃まではしばしば可変的な属性とみなされていた gender identity 概念が、医学雑誌や一般雑誌において core gender

identity 概念の代替としてふるまいだし、生得的に意味が変質した。第三に、90 年代終盤より、とりわけセクシュアリティ論の「性の多様性／多層性」の議論の中で、gender role 概念が変化可能な属性として強調されだした。結果として性別越境も、可変的な gender role 概念を陰影として、不変的・生得的であるという説明が突出していった。

上記にみられる gender identity 概念の変質は、性別越境の解釈を一義化する点で、たしかに性別越境のとらえ方・語り方から多様性を失わせたといえる。しかしそれが「クィアな可能性を閉じる」変化であったとは一概に言いがたく、さらなる研究が必要であると結論づけた。

⑥ベアバックセックスと男性性（吉仲崇）：日本のベアバックセックス（コンドームを使わないセックス）の現状は、インターネットの掲示板が中心であり、ベアバックセックスをしたい人が書き込みをし、待ち合わせをしてセックスを行なうという方法がもっとも多く見られる。日本の状況を分析すると、欧米との研究に共通点と相違点が見えてくる。単純にコンドームのないセックスというリスクに性的興味、関心を持ち、ベアバックセックスを行なう人がいるという点は共通している。しかし、ジェンダー表象が絡んでくる点では相違も見られる。欧米の研究結果では、ベアバックセックスというのは、ある共通したヘゲモニックマスキュリニティ（支配的男性性）の達成・証明というゴールに向かう通過儀礼の役割を果たしているように見える。他方、日本ではベアバックセックスと男性性の関連は不明確であり、ジェンダー役割を流動的に変化させ、同時に男性性を維持し、ベアバックセックスに意味づけをすることが可能であると思われた。これは、少なくとも欧米の男性性の追及とは性質の異なるやり方であるといえる。日本におけるベアバックセックスと男性性の追求、ジェンダー表象の関連性は、不明確な点も多く、今後追求していく必要がある。

⑦男性同性愛メディアにおける「英米」の影響（菅沼勝彦）：本研究では日本におけるクィア・スタディーズの可能性を探る上で、英米文化におけるジェンダー、セクシュアリティの在り方を日本の文脈へ直接応用するには限界が生じることを確認した。しかし同時に英米文化が日本のクィア文化に及ぼしてきた影響を無視することは出来ない。英米クィア文化の直接応用的な視野を問題視し、それに代わるオータナティブな枠組みで国家間又は地域間のクィア文化の交流を捉え直す為には、日本のクィア文化がどのように英米のクィア文化と接して来たのかという系譜をまず整理する作業も必要となる。本研究ではその一例として戦後日本の男性同性愛に関連するメディアを対象に言説分析を行なった。それらのメディアがどのように英米のクィア文化、あるいはジェンダー、セクシュアリティの在り方を捉えていたのか、また認識し取り入れていたのかに焦点をあて、ポストコロニアル理論、異文化比較論、そして人種論などを頼りに分析を行なった。その結果、戦後のそれぞれの時期によって特徴を異にするものの、多くの場合に海外からの情報の影響により日本のクィア文化が「失われる」ということはなく、逆に海外からの影響に応答、または反映される形で日本のクィア文化が進展してきたということが解ってきた。この結論は暫定的なものであるが、日本におけるクィア・スタディーズの可能性を考えるにおいて次のような異文化比較の視野の必要性を示唆しているといえるだろう。それは英米からの影響が日本のクィア文化にとって「適しているもの」、「適していないもの」ということを問い続けるよりは、いかにしてそれらが日本の文化に影響を及ぼしてきたのかを問うこと自体の重要性が明らかになってきたことである。

⑧ゲイ・ブーム分析（風間孝）：本研究では、映画、雑誌、テレビでゲイ男性が中心的なキャラクターとして扱われ、主要なオーディエンスが若い女性であった「ゲイ・ブーム」のさなかに放映されたテレビドラマ『同窓会』における男色の表象に注目し、現代において前近代の男色ファンタジーが持つ意味について考察した。分析に当たっては、男色ファンタジーを文化的な神話として棄却するのではなく、我々の生活における心的「現実」としてとらえるアプローチを採用した。その結果、男色に焦点を当てた歴史的記述は、(A) ゲイ・アイデンティティの観念を拒絶する根拠として用いられていること、(B)ゲイ・バッシングの場面や家族への密告電話等にみられるホモフォビックな社会における不安とその現実からの忘却、抵抗の意味を付与されていること、(C) 男色における関係性が女性を犠牲とすることによって可能になっており、男色表象に家父長的でホモフォビックな構造が存在していること、を明らかにした。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 29 件）

① 堀江有里、「結婚」する権利？―日本における同性愛者の権利獲得運動とその可能性―、人権教育研究、査読無、18 巻、2010、23－45

② 谷口洋幸、国際法における性的指向・性別自認と人権、法学新報、査読有、116巻、3－4号、2009、523-548
③ 吉仲崇、男性誌に見る身体啓発とナルシシズムの戦略-ナルシシストを批判する女性・無視する男性の分析、国際文化研究紀要、査読無、15巻、2008年、25－50

〔学会発表〕（計43件）
① 清水晶子、女性の時間とクィアな再生産、東京大学英文学会、2010年3月20日、東京大学
② Maree Claire、“Narrating Queer Time”、Inter-Asia Cultural Typhoon 2009: Cultural Studies and Asia、2009年7月5日、東京外語大学
③ 川坂和義、The ‘Future’ of ‘Queer Time’、Inter-Asia Cultural Typhoon 2009: Cultural Studies and Asia、2009年7月5日、東京外語大学
④ 風間孝、ゲイ・カップルと異性愛女性―テレビドラマ『同窓会』を読み解く―、第30回日本女性学会大会、2009年6月27日、お茶の水女子大学
⑤ 河口和也、「あたしたちはここにいますよ」―日本の地方都市に住む一人のレズビアンの生活事例、第30回日本女性学会大会、2009年6月27日、お茶の水女子大学
⑥ 釜野さおり、レズビアン（カップル）の仕事と経済の実態、第30回日本女性学会大会、2009年6月27日、お茶の水女子大学
⑦ 石田仁、現在におけるgender identityの「説明」とその問題点、第30回日本女性学会大会、2009年6月27日、お茶の水女子大学
⑧ 菅沼勝彦、薔薇と咲いたハイブリッドな白人性―1970年代『薔薇族』にみるコロニアルな人種言説の撹乱、第1回クィア学会大会、2008年11月9日、広島修道大学

〔図書〕（計14件）
① 風間孝、河口和也、岩波書店、同性愛と異性愛、2010、223
② 石田仁、お茶の水書房、性同一性障害：ジェンダー・医療・特例法、2008、316
③ マリィ・クレア、発話者の言語ストラテジーとしてのネゴシエーション（切り抜ける・交渉・談判・掛け合い）行為、2007、202

６．研究組織
(1)研究代表者
風間　孝（KAZAMA TAKASHI）
中京大学・国際教養学部・准教授
研究者番号：５０３８７６２７

(2)研究分担者
マリィ　クレア（MAREE　CLAIRE）
津田塾大学・学芸学部・准教授
研究者番号：４０３３９２１３

河口　和也（KAWAGUCHI KAZUYA）
広島修道大学・人文学部・教授
研究者番号：１０３５１９８３

清水　晶子(SHIMIZU　AKIKO)
東京大学・総合文化研究科・准教授
研究者番号　４０３６１５８９
谷口洋幸（TANIGUCHI HIROYUKI）
早稲田大学・法学学術院・助手
研究者番号：９０４６８８４３

堀江　有里（HORIE　YURI）
立命館大学・産業社会学部・講師
研究者番号：６０５３５７５６

(3)連携研究者
釜野　さおり（KAMANO　SAORI）
国立社会保障・人口問題研究所・人口動向部・室長
研究者番号：２０２７０４１５

(4)研究協力者
菅沼　勝彦（SUGANUMA　KATSUHIKO）
大分大学・国際教育研究センター・講師
研究者番号：１０５５０４１０

石田　仁（ISHIDA　HITOSHI）
聖マリアンナ医科大学・医学部・講師
研究者番号　なし

川坂　和義（KAWASAKA　KAZUYOSHI）
東京大学大学院・総合文化研究科・博士課程
研究者番号　なし

吉仲　崇（YOSHINAKA　TAKASHI）
横浜市立大学大学院・国際総合科学研究科・博士後期課程
研究者番号　なし